

10 現状及び任務

本島中部の嘉手納町、北谷町及び沖縄市にまたがる嘉手納飛行場は、300mのオーバーランをもつ2本の滑走路(全長3,689m、幅91m・全長3,689m、幅61m)を有し、極東で最も活発な米空軍基地である。同飛行場には、太平洋空軍第5空軍隷下の第18航空団が駐留しており、他のテナント部隊の役割と併せて、防空、反撃、戦略、空輸、支援、偵察、機体整備等の総合的な基地となっている。

第18航空団の主力は、第18運用群であり、この部隊は、F-15C/Dイーグル戦闘機を有する第44・第67戦闘中隊を主力部隊に、第909空中給油中隊、第961航空空中管制中隊や第31・第33救難中隊等からなる。

同飛行場は、北西側の飛行場地区と南東側の居住地区からなり、飛行場地区の滑走路の南東には、空軍のF-15C/Dイーグル戦闘機の駐機場、エンジンテスト場、小型機洗機場、海軍のP-3Cオライオン対潜哨戒機、P-8Aポセイドン対潜哨戒機及びEP-3電子偵察機等の駐機場、大型・小型機整備格納庫等がある。滑走路の北西、嘉手納町屋良・嘉手納・水釜地域は、空軍の大型機の駐機場等となっており、空軍のKC-135Rストラトタンカー空中給油機、E-3Bセントリー空中早期警戒管制機の大型機、HH-60Gペイブホーク救難機等の駐機場やメンテナンス場、大型・中型機洗機場等がある。

MC-130航空機の運用の移転については、平成8年12月16日に住民地区に近接(約50m)している海軍駐機場(当時)から主要滑走路の北西隅へ移転、嘉手納飛行場における遮音壁の建設については、平成12年7月11日に完成した。

海軍航空機の運用の移転については、平成15年8月1日、沖縄市が海軍航空機の運用及び支援施設の移転受け入れを表明し、平成21年2月10日、海軍駐機場(駐機場、

誘導路、整備格納庫等)を主要滑走路の反対側に移転すること等について、日米合同委員会で合意され、平成29年1月21日、最後の機体が新駐機場へ移動した。海軍には、平成25年12月、P-3Cオライオン対潜哨戒機の後継機であるP-8Aポセイドン対潜哨戒機が6機配備されている。旧海軍駐機場の洗機施設については、小型機の洗機場は、平成18年5月にF-15駐機エリア付近に、大型・中型機の洗機場は、平成20年9月に空軍大型機駐機場(L-11)地区へそれぞれ移転した。

また、平成18年12月末には、陸軍の兵員600人とパトリオット・ミサイル(PAC3)24基が配備されたほか、平成19年2月には、米本国以外ではじめて最新鋭ステルス戦闘機F-22Aラプター戦闘機12機が一時配備された。その後、平成31年2月末までに9回の一時配備が行われている。また、近年は州空軍所属F-16ファイティングファルコン戦闘機の一時配備のほか、平成29年11月から平成30年5月までF-35AライトニングII戦闘機が一時配備された。

平成31年2月より、第353特殊作戦群(現:第353特殊作戦航空団)関連施設の整備工事開始に伴い、住宅地域に隣接する通称「パパーループ」と呼ばれる元駐機場がMC-130特殊作戦機の一時的な駐機場として使用されるようになり、駐機場完成後も、整備格納庫が完成していないことを理由にパパーループの使用が引き続き行われている。

SACO最後報告において、読谷補助飛行場から伊江島補助飛行場への移転が合意されたパラシュート降下訓練については、日米合同委員会で確認された「例外的な場合」の使用を理由に、近年立て続けに嘉手納飛行場で実施されている。

嘉手納基地に飛来する機種(外来機)



FA-18D ホーネット戦闘攻撃機



F-22A ラプター戦闘機



F-35B ライトニングII戦闘機



F-16C ファイティングファルコン戦闘機



MH-60S ナイトホーク多用途ヘリ



CV-22B オスプレイ輸送機